錆釉染付の掛け分け技法について

A Study on the Separation Method of Underglaze Cobalt Blue and Iron Oxide Glaze

髙森 誠司
九州産業大学
Takamori Seiji
Kyushu Sangyo University

Key words: Underglaze Cobalt Blue, Iron Oxide Glaze

要旨

400 年を越える歴史がある有田焼の様々な技法の中で、今回の研究では錆釉染付の技法を取り上げた。錆釉と染付釉の掛け分けには伝統的な手法に撥水剤を加えることで、より簡易に行えるようになった。しかし製作過程においては、伝統工芸の高い手技の必要性を再認識した。

Summary

This research focused on dyeing tchniques in various techniques of arita yaki that have a history over 400 years. By adding a water-repellent agent to the traditional method of separating glaze and dyeing. it became easier to do.

However I reaffirmed the need for high traditional craftsmanship in the production process.

1． はじめに

約 400 年の歴史を持つ有田焼は多種多様な成形技法・加飾技法・絵具・釉薬・焼成を駆使した製品作りが行われたなかで、今回は錆釉染付の技法による製品に注目した。

以前は石川県加賀市大聖寺、吸坂地区で作られたと推測され吸坂手と古陶磁愛好家から親しまれてきたが、近年の発掘調査で有田製であると判明している。

染付と錆釉の掛け分け技法ではゴム液でマスキング加工をしての施釉、染付釉に撥水性を保たせ錆釉との間に出来てしまう隙間の疵を処理する方法について研究した。

染付の絵柄も錆釉染付の伝世品にはない絵柄を描いた。

2．使用した釉薬と素土

錆釉と染付釉の掛け分けについて用いた錆釉は、佐賀県西松浦郡有田町近郊で産出した含鉄鉱物を使用し、これに長石と合成柞灰を加えて作った錆釉であり、これは九州産業大学伝統みらいセンター論集第 4 号「錆釉染付についての復元研究」で報告した釉薬に基づいている。

染付釉は同じく有田町で産出する白川山土に合成柞灰を加えて作った釉薬を使用した。素地はロクロ成形で行い、素土は天草磁土の中で最も鉄分を多く含有する撰下土を用いた。

鉄分が多い為に染付に侘びたあじわいが出るのが特徴ではあるが、反面成形時に疵が出やすく、焼成に於いても素地にヘタリが出やすい等、他の精製された天草磁土に比べて扱いにくいが、方法によっては古色を帯びた味わい深い磁土とも言える。

3．制作工程

制作工程については図 1 に示す。

1）ロクロ成形（天草撰下土使用）

2）高台削り

3）乾燥

4）素焼き（900 度）

5）鉛筆での下描き（流水菊・柘榴・菖蒲・色紙・渦・菊花）

図1　制作工程

6）下絵付け（骨描き）

7）下絵付け（濃み）

8）下絵付け部分にゴム液を使用してマスキング

9）下絵付け部分を残し周囲をゴム液を使用してマスキング

10）銹釉を施釉

図１の続き

11）假焼してマスキングを焼き除く

12）染付釉を筆塗り施釉

13）CH-H と CH-L を加えた染付釉の筆塗り施釉

14）銹釉の施釉

15）銹釉と染付釉の境界を指先で擦る

図 1 のつづき

４．焼成結果

試作の焼成結果を図２から図４に示す。

１- Ａ～１- Ｅは、染付釉を筆塗り施釉した部分がムラがあり呉須発色に焦げが見られる。

２- Ａ～２- Ｅは、染付釉自体に撥水性を持たせる為に（有）新昭和コート製の陶磁器用撥水剤 CH－Ｈと CH－Ｌを併用して使用した。

染付釉を筆塗り施釉のムラが改善されて呉須の発色は安定しているが、染付釉と銹釉の境目に出来た隙間が目立つ（図５）。

３- Ａ～３- Ｅは、染付釉を僅かながら流動性が出る方向に調整し、且つ銹釉施釉後に染付釉との境目を指でなぞり焼成した結果、２- Ａ～２- Ｅと比較して境目も目立たず仕上げる事が出来た。

５．考察

研究目的であった銹釉と染付釉の境界に出来る疵の処理については、釉薬に撥水性を持たせ指先で境界部を擦る事で目的の結果を得る事ができた。

今後の課題については、銹釉の発色や釉調について特徴的な銹釉を使用する事で独自性のある表現が可能になるのではないかと考えられる。

６．まとめ

江戸時代、一部の窯跡からのみ大量に発掘され、その窯での固有技法と見られる銹釉染付の技法であるが、今回は釉薬の掛け分け技法についてゴムでのマスキング、糊を加えた釉薬の筆塗り、撥水性を持たせた釉薬による筆塗り施釉を試した。しかし不透明な釉薬な為に筆塗り時の釉薬の厚みが掴めずに苦

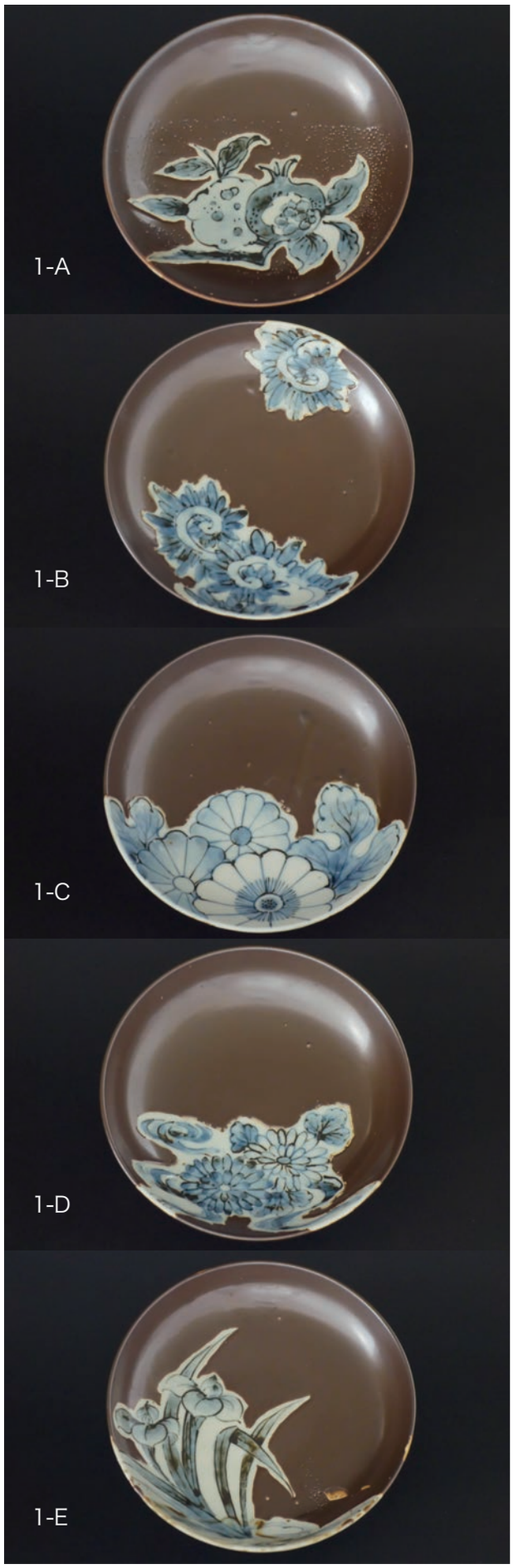

図２　試作１の焼成結果

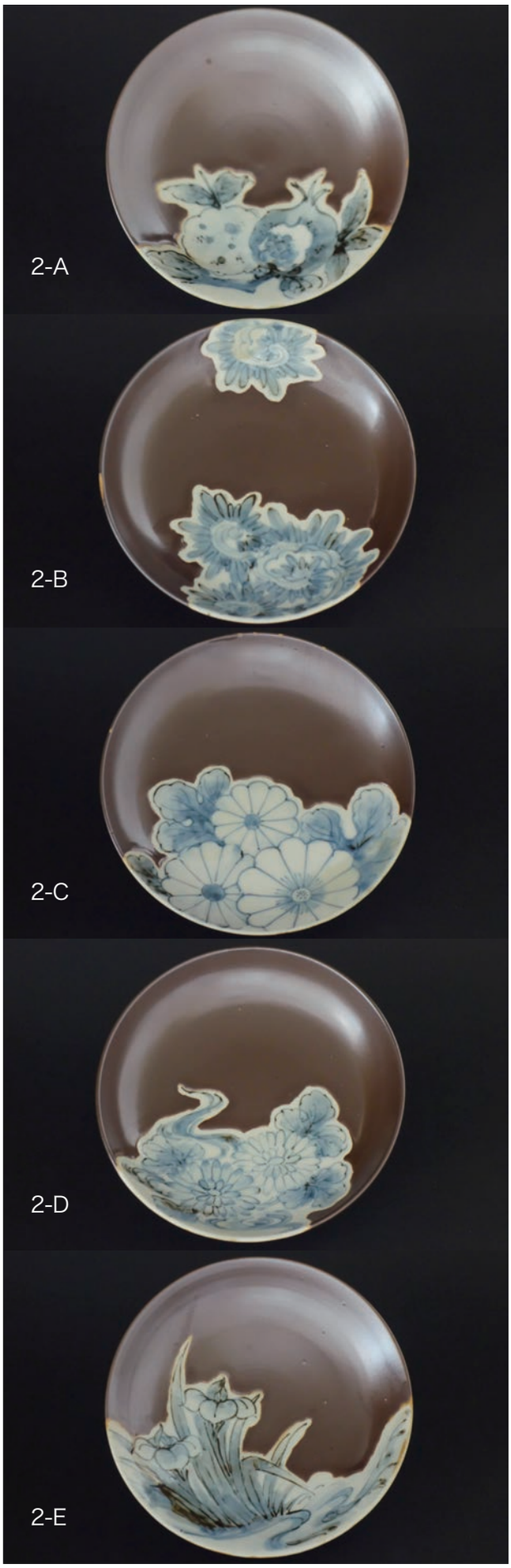

図３　試作２の焼成結果

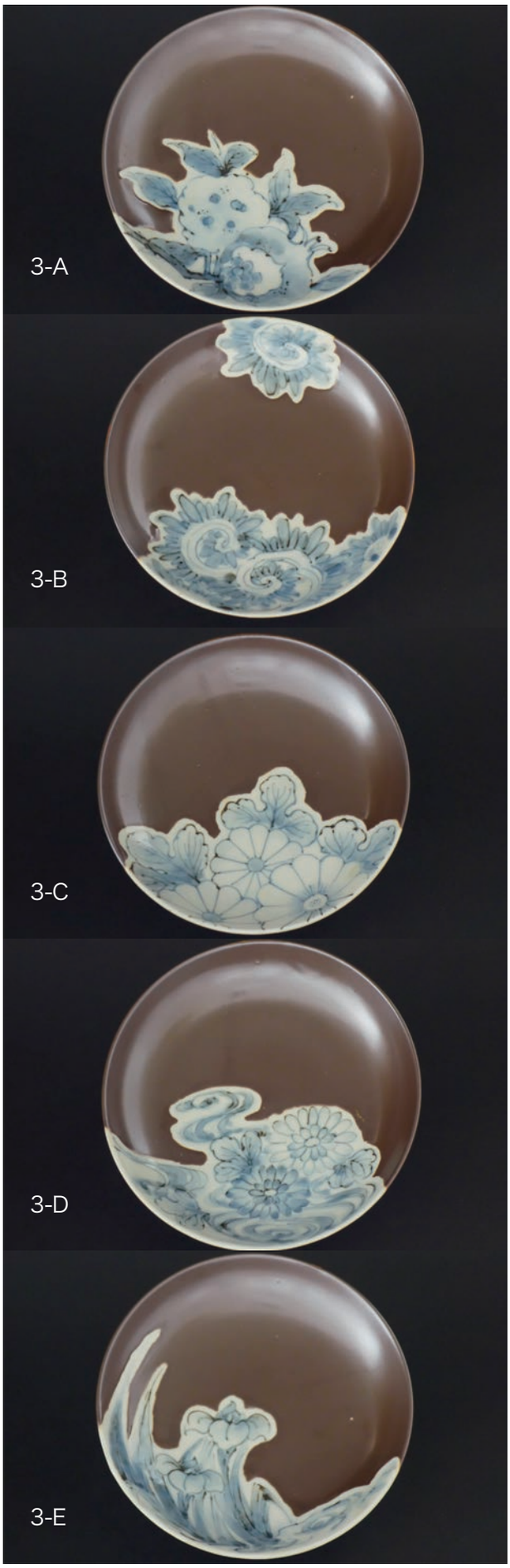

図４　試作３の焼成結果

労し、改めて当時の職人たちの持つ技術の高さには感心した。

伝世品を観察していると器物裏面の銹釉は浸し掛けでなく、筆塗り施釉したものもあり、また銹釉の発色も多種多様であるなど、銹釉染付の技法に作家として個性的な表現の可能性があるとの認識を持った。

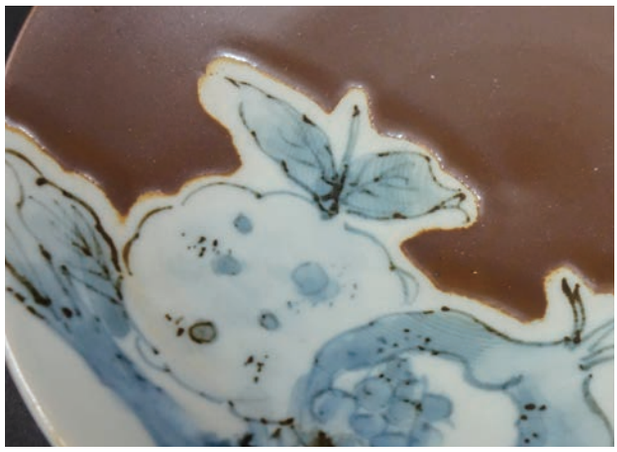

図５　2-A の染付釉と銹釉の境目に出来た隙間

参考文献

[1] 髙森誠司（2021 年）『銹釉染付についての復元研究』九州産業大学伝統みらい研究センター論集第４号，PP.49-56.